

# 天草方言で詠む【万葉集】 鶴田 功〈訳文〉

万葉集は、7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた、現存するわが国最古の歌集で、全20巻からなり、約4,500首の歌が収められています。

万葉集の編纂については、詳細不明ですが、数人の人の手を経て、最終的には大伴家持の手によって20巻にまとめられたのではないかとされています。

古典を紐解き、現代人が失いかけている万葉人の精神文化や、日本の原風景に触れてみたくて、万葉集の原文を天草方言に訳してみました。



〈太字は原文〉

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山

登り立ち 国見をすれば 国原は 煙 立ち立つ

海原は 鷗 立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は (舒明天皇 巻1・2)

大和にゃ ぎょうさん山のあるばってん とりわけ美しか天の香具山に登って

国を見わたせば 里野には 竈の煙があちこちから立ち上って

海原にゃ 鷗が飛び交うとる まこてよか国ソ この大和の国は

※「煙」は煙 天草方言「けぶり」 ※「かまめ」は、カモメ

※「蜻蛉島」は、「大和」に掛かる枕詞 蜻蛉はトンボの意

※ 枕詞とは、主として歌に見られる修辞で、特定の語の前に置いて語調を整えたり、情緒を添えることばのことである

山越の 風を時じみ 寝る夜落ちず 家なる妹を かけて憊びつ (軍王 巻1・6)

山を超して 風ン時ならず吹いて来るけん ひとり寝る夜毎夜毎

家に残えとる妻のことが 気掛かりで思い慕うとりますと

※「ぬる」は、寝る 天草方言「ぬる」 ※「妹」は、「妻・奥様・恋人」

君が代も 我が代も知るや 岩代の 岡の草根を いざ結びてな (中王命 巻1・10)

あなたの命も私の命も ここ磐代の岡の心のまま そこに生えとる草を結ぼうだ

そして命の無事を祈ろうだネ

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る (額田王 巻1・20)

紫草の生えた 天皇領地の野原を歩いとるとき あなた様が私に 袖を振ってる

(求愛なさる) ところを 野原の番人に見られとるかも知れんとに…

※「あかねさす」は、「紫・日・昼」に掛かる枕詞 ※「紫野」は、紫草(染料)を栽培した平野

※「標野」は、御料地 ※「袖振る」は、意志を伝える（求愛）・人の魂を鎮める

紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに あれ恋ひめやも （大海人皇子 巻1. 21）  
紫草のごて美しかあなたを 憎っかとならば 何で 人妻のあなたを 恋するもんかネ  
なんさま あなたが可愛ゆうして 好きだもん

よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見つ （天武天皇 巻1. 27）  
昔の立派な方が よか所ちゆうて ゆうっと見て 素晴らしかちゆわした  
何さまこの吉野をゆう見てみろネ 今の善良なあなたたちも ゆうっと見てみなっせ

春過ぎて 夏来たるらし 白妙の<sup>しろたえ</sup> 衣ほすてふ（ほしたる） 天の香具山 （持統天皇 巻1. 28）  
春が過ぎて もう夏が来たごたる 聖なる香具山辺りにゃ  
真っ白か衣を いっぴゃ乾してある

※「白妙の」は、「衣・袖」に掛かる枕詞 （楮<sup>こうぞ</sup>の繊維で織った白い布）

楽浪の<sup>ささなみ</sup> 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも （柿本人麻呂 巻1・31）  
志賀の大きか入江ン水は 流れんで淀んどるばって  
時の流れと共に過ぎ去った昔ン人達にゃ 再び会うことンあどかい  
いんにゃ もう逢えんかもしれん

いづくにか 舟泊<sup>ふなほ</sup>てすらむ 安礼<sup>あれ</sup>の崎 漕ぎたみ行きし 棚なし小舟 （高市黒人 巻1. 58）  
今ごろ どこに舟泊まりしとっとじゃろかい 安礼の崎を 漕ぎ巡って行た  
あん舟棚も無か 小か舟は ※「安礼の崎」（愛知県宝飯郡御津町）

いざ子ども はやく日本へ<sup>やまと</sup> 大伴<sup>おほとも</sup>の 御津<sup>みつ</sup>の浜松 待ち恋ひぬらむ （山上憶良 巻1. 63）  
さあ皆の者ども 早う日本さん帰ろだ 大伴の御津の浜ン松原も  
我々を待ち焦れとるこっじゃろう

※山上憶良は、文武天皇の大宝元年（701年）に遣唐大使・粟田真人に随行し、  
3年ほど滞在した

草枕 旅行く君と 知らませば 岸の黄土に にほはさましを （清江娘子 巻1・69）  
旅のお人じゃんすとを 存じ上げとれば 岸の黄土で あなた様の衣を  
染めて差し上げもしたとに まこてマ

飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて去<sup>い</sup>なば 君があたりは 見えずかもあらむ （元明天皇 巻1・78）  
明日香の古京を 後にして 行たてしもうたら  
あなたの辺りは 見えンごてなりゃせんどかね

※「飛ぶ鳥の」は、「明日香」に掛かる枕詞？ （奈良県高市郡明日香村）

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の <sup>いわ</sup>磐根し <sup>ま</sup>枕きて 死なましものを (磐姫皇后 巻2・86)  
こがん 恋い焦がれとるよりか 高山の岩を枕にして  
いっそんこて 死ねばよかったて まこて

ありつつも 君をば待たむ 打ちなびく わが黒髪に 霜の置くまでに (磐姫皇后 巻2・87)  
こんまますと あの人バ待とうバイ ふさふさとしたこの黒髪に  
白髪の混じるまででん

<sup>い</sup>居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 我が黒髪に 霜は降るとも (磐姫皇后 巻2・89)  
こんまま夜明けまで ずっとあの人を待とう 私の黒髪が たとえ白髪になったっちゃ  
※「ぬばたまの」は、「夜・黒・黒髪」に掛かる枕詞

妹が家も 継ぎて見ましを 大和なる 大島の嶺に <sup>ね</sup>家もあらましを (天智天皇 巻2・91)  
逢えんとなろば せめてあなたの家を いつでん見られたろばなあ 大和の大島ん山頂に  
私の家があればよかったとに そっからなろば いつでんあなたの家  
見らるっちゃって

秋山の <sup>こ</sup>樹の <sup>した</sup>下 <sup>かく</sup>隠り <sup>ゆ</sup>逝く水の われこそ増さめ 思ほすよいは <sup>かがみのおおきみ</sup>(鏡王女 巻2・92)  
秋の山の樹の 下を隠れて流るる水が 秋にはうんと水かさを 増すごて  
私のほうが ずっとあなた様を 思うとりますとヨ  
あなた様が私を 思ってくださいるよりかも ずーっとずーっと

<sup>たまくしげ</sup>玉櫛笥 <sup>おほ</sup>覆 <sup>やす</sup>心を易み 開けていなば 君が名はあれど わが名惜しも (鏡王女 巻2・93)  
美しか櫛箱に蓋をするごて 二人の仲を覆い隠すとは 簡単ち おっしゃいますばって  
あなた様は 浮き名が立っても構わんでしょうが 私ゃ困ります 嫌ですばい  
(どうぞ 夜の明けんうちに 早よ ここを出て行ってくださいませ)  
※「玉櫛笥」は、「覆う・あける・<sup>みもろ</sup>三輪」に掛かる枕詞 (櫛箱は化粧箱)

<sup>たまくしげ</sup>玉櫛笥 <sup>みもろ</sup>三輪の山の さなかづら さ寝ずは遂に 有りかつましじ(藤原鎌足 巻2・94)  
三輪の山の さなかずらの名にあやかって 木にぴったり巻き付いて  
いつまでん あんと <sup>さね</sup>共寝していたかさね ※「さなかずら」は、「共寝」の掛詞



※ <sup>かけことば</sup>掛詞とは、同じ音、あるいは類似音のことばに、二つ以上の意味を込めて表現する方法

<sup>みこも</sup>水篋刈る 信濃の真弓 我が引かば <sup>うまひと</sup>貴人さびて 否と言はむかも (久米禅師 巻2・96)  
あなたの袖を引けば 淑女ぶって イヤッチ 言うちゃろうネ

※み薦刈る信濃の真弓は、袖を引く(求愛)の誘導語 ※「弓」は、「引く・張る」の掛詞

<sup>みこも</sup>水篋刈る 信濃の真弓 引かずして <sup>し</sup>強ひざるわざを 知ると言はなくに (石川郎女 巻2・97)

私<sup>シ</sup>袖<sup>そで</sup>を 強<sup>つよ</sup>う引<sup>ひ</sup>きもせんくせに 知<sup>し</sup>らんヨ (いっちょんすかん)

<sup>あすさ</sup>梓<sup>す</sup>弓<sup>ゆみ</sup> 引<sup>ひ</sup>かばまにまに 依<sup>よ</sup>らめども 後<sup>のち</sup>の心<sup>こころ</sup>を 知<sup>し</sup>りかてぬかも (石川郎女 巻2・98)  
弓<sup>ゆみ</sup>を引<sup>ひ</sup>くごて 私<sup>シ</sup>の心<sup>こころ</sup>を引<sup>ひ</sup>かるっとなろ あなたの気<sup>き</sup>もちにも 添<sup>そ</sup>いましょうばって  
後<sup>のち</sup>々<sup>々</sup>のお心<sup>こころ</sup>についてにゃ 分<sup>わ</sup>かりませんしネ (よかよ ばって心<sup>こころ</sup>変わりが心配<sup>しんぱい</sup>じゃん)

我<sup>わが</sup>が里<sup>さと</sup>に 大<sup>おほ</sup>雪<sup>ゆき</sup>降<sup>ふ</sup>れり 大<sup>おほ</sup>原<sup>の</sup> 古<sup>ふる</sup>りにし里<sup>さと</sup>に 降<sup>ふ</sup>らまくは後<sup>のち</sup> (天武天皇 巻2・103)

我<sup>わが</sup>が里<sup>さと</sup>にゃ 大<sup>おほ</sup>雪<sup>ゆき</sup>が降<sup>ふ</sup>ったとばい そち<sup>の</sup>の古<sup>ふる</sup>びた里<sup>さと</sup>に雪<sup>ゆき</sup>の降<sup>ふ</sup>っとは  
まーだ後<sup>のち</sup>じゃろだねえ

わが岡<sup>の</sup> おかみに言<sup>い</sup>ひて 降<sup>ふ</sup>らしめし 雪<sup>ゆき</sup>のくだけし そこに散<sup>ち</sup>りけむ (藤原夫人 巻2・104)

うち<sup>の</sup>岡<sup>の</sup>の龍<sup>りゆう</sup>神<sup>しん</sup>に言<sup>い</sup>いつけて 降<sup>ふ</sup>らせた雪<sup>ゆき</sup>が 砕<sup>くだ</sup>けてそち<sup>の</sup>に降<sup>ふ</sup>ったとヨ

(何<sup>なに</sup>ば言<sup>い</sup>いよっとネ) ※ 上記(2-103)の天武天皇が藤原夫人に贈<sup>くわ</sup>った歌<sup>うた</sup>にお答<sup>こた</sup>えした歌

我<sup>わが</sup>が背<sup>せ</sup>子を 大<sup>おほ</sup>和<sup>わ</sup>へ遣<sup>や</sup>ると さ夜<sup>よ</sup>更<sup>ま</sup>けて 暁<sup>あかつき</sup> 露<sup>つゆ</sup>に 我<sup>わが</sup>が立<sup>た</sup>ち濡<sup>ぬ</sup>れし (大泊皇女 巻2・105)

我<sup>わが</sup>が弟<sup>あに</sup>を 大<sup>おほ</sup>和<sup>わ</sup>さん送<sup>おく</sup>り返<sup>かへ</sup>したもん<sup>の</sup>の 夜<sup>よ</sup>は深<sup>ふか</sup>う沈<sup>しず</sup>んで  
暁<sup>あかつき</sup>の露<sup>つゆ</sup>に 私<sup>シ</sup>は立<sup>た</sup>ちつ<sup>く</sup>したま<sup>ま</sup> 濡<sup>ぬ</sup>れてしもた (徒<sup>と</sup>然<sup>ぜん</sup>のうな<sup>な</sup>ったヨ)

人<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>を繁<sup>こ</sup>み 言<sup>こと</sup>痛<sup>いた</sup>み 己<sup>おのれ</sup>が世<sup>よ</sup>に いまだ渡<sup>わた</sup>らぬ 朝<sup>あさ</sup>川<sup>が</sup>渡<sup>わた</sup>る (但馬皇女 巻2・116)

人<sup>ひと</sup>の噂<sup>うわさ</sup>が煩<sup>こ</sup>わしゅうして 私<sup>シ</sup>も今<sup>いま</sup>までな<sup>な</sup>るば<sup>ば</sup>って 渡<sup>わた</sup>ったこと<sup>こと</sup>もな<sup>な</sup>か 朝<sup>あさ</sup>の川<sup>が</sup>を渡<sup>わた</sup>ります

ますらをや 片<sup>かた</sup>恋<sup>こひ</sup>せむと 嘆<sup>なげ</sup>けども 醜<sup>しこ</sup>のますらを なほ恋<sup>こひ</sup>ひにけり (舎人皇子 巻2・117)

立<sup>た</sup>派<sup>は</sup>な男<sup>おとこ</sup>子<sup>こ</sup>が 届<sup>とど</sup>かん片<sup>かた</sup>思<sup>おも</sup>いなんのす<sup>す</sup>るもん<sup>の</sup>じゃな<sup>な</sup>か ち<sup>ち</sup>ゆて嘆<sup>なげ</sup>いてみるば<sup>ば</sup>って  
見<sup>み</sup>たむな<sup>な</sup>かこ<sup>こ</sup>ん男<sup>おとこ</sup>は そ<sup>そ</sup>っでん恋<sup>こひ</sup>してしもうと<sup>と</sup>る 我<sup>わが</sup>ながら情<sup>なさけ</sup>けにゃあもん<sup>の</sup>じゃ

家<sup>いへ</sup>にあれば 筥<sup>へ</sup>に盛<sup>いひ</sup>る飯<sup>いひ</sup>を 草<sup>くさ</sup>枕<sup>まくら</sup> 旅<sup>りょ</sup>にしあれば 椎<sup>し</sup>の葉<sup>は</sup>に盛<sup>いひ</sup>る (有間皇子 巻2・142)

家<sup>いへ</sup>にお<sup>お</sup>っときゃ きれ<sup>い</sup>ーか器<sup>き</sup>に盛<sup>いひ</sup>る飯<sup>いひ</sup>も 旅<sup>りょ</sup>の途<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>だけ<sup>ん</sup>

しよ<sup>しよ</sup>んなか<sup>か</sup>けん 椎<sup>し</sup>の葉<sup>は</sup>に盛<sup>いひ</sup>った ※「草枕」は、「旅」に掛<sup>か</sup>かる枕<sup>まくら</sup>詞<sup>ことば</sup>

近<sup>い</sup>江<sup>え</sup>の海<sup>うみ</sup> 夕<sup>ゆふ</sup>波<sup>なみ</sup>千<sup>ち</sup>鳥<sup>と</sup> 汝<sup>なんぢ</sup>が鳴<sup>な</sup>げば 心<sup>こころ</sup>もしのに 古<sup>いにしへ</sup> 思<sup>おも</sup>ほゆ (柿本朝臣人麻呂 巻3・266)

近<sup>い</sup>江<sup>え</sup>の湖<sup>うみ</sup>の 夕<sup>ゆふ</sup>波<sup>なみ</sup>に鳴<sup>な</sup>く千<sup>ち</sup>鳥<sup>と</sup>よい お前<sup>まへ</sup>が鳴<sup>な</sup>げば 私<sup>シ</sup>の心<sup>こころ</sup>も しお<sup>し</sup>れてしもう<sup>う</sup>て  
昔<sup>むかし</sup>のことば 思<sup>おも</sup>いじゃ<sup>あ</sup>ーて せつ<sup>せつ</sup>のう な<sup>な</sup>っじゃ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>ネ

※「古」=天智天皇の時代(琵琶湖畔に都があった頃)のこと

むささびは 木<sup>こ</sup>末<sup>すえ</sup>求<sup>もと</sup>むと あしひきの 山<sup>やま</sup>の獵<sup>りつ</sup>師<sup>し</sup>に あひにけるかも (志貴皇子 巻3・267)

ムササビが 梢<sup>こすえ</sup>に登<sup>のぼ</sup>ろうてして 山<sup>やま</sup>の獵<sup>りつ</sup>師<sup>し</sup>に きゃ<sup>きゃ</sup>ー見<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>った<sup>た</sup>ばい

※「あしひきの」は、「山」に掛<sup>か</sup>かる枕<sup>まくら</sup>詞<sup>ことば</sup>

旅<sup>りょ</sup>にして もの恋<sup>こひ</sup>しきに 山<sup>やま</sup>下<sup>した</sup>の 赤<sup>あか</sup>のそ<sup>そ</sup>ほ舟<sup>ふね</sup> 沖<sup>おほ</sup>に漕<sup>こ</sup>ぎ見<sup>み</sup>ゆ (高市黒人 巻3・270)

旅しよって 何とはなく恋しか思いをしとつ時 山裾に居った朱塗りン舟が  
沖さん漕いで行くトン見ゆる ※「山下の」は、「赤」に掛かる枕詞？

田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺 雪は降りける (山部赤人 巻3・318)  
田子の浦を通過して 眺めのよか処に出てみたりや  
真っ白か富士の高嶺に 雪の降り積もつとるヨ

※「田子の浦ゆ」は、静岡県駿河湾北西部の浜 「ゆ」は、通過地点を表す

あをによし 寧樂の京師は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり (小野老朝臣 巻3・328)  
奈良の都は ちょうど爛漫に咲き臭う花のごて 繁栄しとるばい

※「あおによし」は、「寧樂」に掛かる枕詞 寧樂の京師 (平城京)

駿なき ものを思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし (大伴旅人 巻3・338)  
しよんなかこっぱ思い悩むよりか 一ぴゃ濁り酒どん 飲うだほうがましばい

なかなか 人にとあらずは 酒壺に 成りにてしかも 酒に染みなむ (大伴旅人 巻3・343)  
むしろ人間でおるよりか 一層ンこて酒壺になろごたる  
そうすれば ずっと酒に浸っておらるってえ

あな醜 賢しらをすと 酒飲まぬ 人をよく見れば 猿にかも似る (大伴旅人 巻3・344)  
ああ なんちゅう醜らしか 酒も飲までん 利口かぶつとる奴を ゆうっと見れば  
まっで猿のごたったい

世間を 何に喩へむ 朝開き 漕ぎ去にし船の 跡なきごとし (沙弥満誓 巻3・351)  
世の中ば 何に例えたるば よかるかい 夜明けの朝早う 港を漕ぎ出した舟の航跡が  
何も残つとらんごたるふう (人生行路もそがんふうばい)

愛しき 人のまきてし 敷妙の わが手枕を まく人あらめや (大伴旅人 巻3・438)  
愛しい妻が 枕にして寝た 私のこの腕を 枕にする女の 他に誰が おりーろ

※「敷妙の」は、「枕・手本・床・袖」に掛かる枕詞

妹と来し 敏馬の崎を 還るさに 独りし見れば 涙ぐましも (大伴旅人 巻3・449)  
妻と通った敏馬の崎を 帰りしな 一人で見たりや 思い出やーて涙の 出てきたバイ

※「敏馬」は、神戸市灘区岩屋 「見ぬ女」の掛詞

妹として 二人作りし 我が山齋は 木高く繁く なりにけるかも (大伴旅人 巻3・452)  
妻と二人バリで造った我が家の庭園は 木立も高うなって生い繁ったバイ

君待つと 我が恋ひをれば わが屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く (額田王 卷4・488)  
あの方を恋しゅうして 待っておれば 我家の戸口のすだれば 動かすとは  
ただ秋風ばかり ※「屋戸」(家・住まい・庭) ※額田王が天智天皇を恋慕って贈った歌

風をだに 恋ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ (額田王 卷4・489)  
風が吹くだけで いらっしやうたと思うくりや 待ち焦がるるちゅうとは羨ましか  
風にしかそがん思えっとなろ 何バ嘆くことンあるきゃ (私にや待つ人もおらんテエ)

雨つつみ 常する君は 久方の 昨夜の雨に 懲りにけむかも (大伴坂上郎女 卷4・519)  
雨が降れば出不精になるあなたは いつものことばって 昨夜の雨に懲りて  
来てにや 下さらんとじゃろネ ※「久方の」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものを  
(大伴坂上郎女 卷4・527)

あなた様は 「来る来る」ちゆわしたっちゃ 来なさらん時も あるもね  
「来ん」 ちゆわしたばって ひよっとすれば「来らすかも」ちゆて  
期待して待とつとは やめときまっしゅ 「来ん」ちゆて言わずと じゃけん

事もなく 生き来しものを 老いなみに かかる恋にも 我はあへるかも (大伴百代 卷4・559)  
なんちゅうこたなし 平凡に生きてきたばって 老いが近まった今  
目の覚むるごたる恋に 私や 出会ったとヨ

我が形見 見つづゝばせ あらたまの 年の緒長く 我も思はむ (笠郎女 卷4・587)  
私の思い出の品を 見ながら 私を思ってくださいませ 私も ずっと長う  
あなた様を 思い続けますけん ※「あらたまの」は、「年」に掛かる枕詞

我が屋戸の 夕影草の 白露の 消ぬがにもとな 思ほゆるかも (笠郎女 卷4・594)  
私の家の庭の 夕影草の白露が やがて消えてしまうごて 身も心も消えてしまうくらい  
あなた様のことばかり 思うとつとヨ

恋にもそ 人は死にする 水無瀬川 下ゆ我瘦す 月に日に異に (笠郎女 卷4・598)  
恋のために 人は死んだりもするばって 水無瀬川ン伏流水のごて  
人知れず 私や瘦せ衰えてしまう 月日を追う毎に

月夜には 門に出で立ち 夕占 問ひ 足占をそせし 行かまくを欲り (大伴家持 卷4・736)  
月の夜にや 門口に立って 夕方の占いをしたり 足占いをしたとヨ  
あんたん所れ 行こうどもてネ

しろがね ぐがね ぎよく 何せむに 勝れる宝 子に及かめやも (山上憶良 巻5・802)  
銀も金も玉も 何になろうきゃ どがしこ勝れた宝っちゃ 子どもに及ぶもんな  
何もなかるもん

我が園に 梅の花散る ひさかた 天より雪の 流れ来るかも (大伴旅人 巻5・822)  
私の園に 梅ン花が散る 天から雪ン 流れて来っどかにゃ  
※「久方の」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

あまざか ひな 天離かる 鄙に五年 住まひつつ 都のてぶり 忘らえにけり (山上憶良 巻5・880)  
遠か地方に五年も 住み続けて 都ン雅な振る舞いも きゃあ忘れてしもた  
※「天離る」は、「鄙」に掛かる枕詞 (都から離れた地方)

天地は広しといへど 我がためは 狭くやなりぬる 日月は明しといへど 我がためは照りや給はぬ  
人皆か 我のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 我もなれるを (山上憶良 巻5・892)  
天地は広かて言うばって 私にゃ狭うなったっか 日や月は明るかちゅうばって  
私のためには照ってくださらんのか 人は皆こがんじゃるか 私にだけこがんじゃるか  
運良く人に生まれついて 人並みに私も育ったとに

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は すめろぎ いつく 皇神の 厳しき国 ことだま さき 言霊の幸はふ国と語り継ぎ  
言ひ継がひけり (山上憶良 巻5・894)  
神代の昔から 言い伝えてある 大和の国は 神が威厳持って守る国  
言霊が幸を もたらす国ちゆて 語り継ぎ 言い継がれてきやしたと

すべ 術もなく 苦しくあれば 出で走り い 去ななと思えど 児等に障りぬ (山上憶良 巻5・899)  
手段も尽きて 苦しゅうして のさんけん 走り出ちゃーて 死んでしまおうかと  
思うばって 子どもたちの事を思えば そうもできん

若の浦に 潮満ち来れば 濁を無み 葦辺をさして たづ 鶴鳴き渡る (山部宿禰赤人 巻5・919)  
若の浦に潮が満ちてくれれば 干濁がなかごてなって  
芦ノ生えた岸辺を 鶴が鳴きながら 渡って行きよるバイ

おのこ むな 土やも 空しくあるべき よろずよ 万代に 語り継ぐべき 名は立てずして (山上憶良 巻6・978)  
男たるもんな 空しかね 万代に語り継がれるごたる 名声を上げもせんで よかもんか

ふりさけて みかつき 若月見れば ひと目見し まよひき 眉引 思ほゆるかも (大伴家持 巻6・994)  
仰にゃーて 三日月を見れば ひと目見たばかり ばって  
あの人のきれーか眉を思い出す

白玉は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 我し知れば 知らずともよし  
(元興寺の僧 巻6・1018)

真珠は 人に知られとらんばって 知られんちゃよかとヨ  
我がしゃか その価値を知っとれば 世間の人は 知らんちゃよかと

一つ松 幾代か経ぬる 吹く風の 声の清きは 年深みかも (市原王 巻6・1042)  
一本松は どぎゃしこだ 時代ば経てきたもねろ 梢を吹く風の音が  
きれーに澄みちぎっととは 深う歳月を 重ねてきたから じゃろうもん

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ (柿本人麻呂 巻7・1068)  
天の海に雲の波が立って 月の舟が星の林に漕ぎ隠るっつが見ゆる

ぬばたまの 夜さり来れば 卷向の 川音高しも 嵐かも疾き (作者不明 巻7・1101)  
真っ暗闇の夜がくれば 卷向川の川音が高うなる 山おろしが ひどうなったっじゃろう  
※「ぬばたまの」は、「夜」に掛かる枕詞

西の市に ただ一人出でて 目並はず 買ひてし絹の 商じこりかも (作者不明 巻7・1264)  
西の市にたった一人で出掛けて 見比べもせんで  
自分だけで見て 買うてしもた絹は 買い損ないじゃった

今年行く 新島守が 麻衣 肩のまよひは 誰か取り見む (作者不明 巻7・1265)  
今年送られて行く 新しか防人の麻衣ン 肩ンほつれは  
一体誰が繕うてやらすとじゃろかい

住吉の 波豆麻の君が 馬乗衣 さひづらふ 漢女を据ゑて 縫へる衣ぞ  
(柿本人麻呂 巻7・1273)

住吉の波豆麻の あの方の乗馬服は 中国渡来の女性を雇うて 縫わせたっですばい

君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春さらば いかなる色に 摺りてば良けむ  
(作者不明 巻7・1281)

あなたのために 手の力もきゃーくたびれて 織った着物ばって 春になったらろば  
どがん色に摺って染めたる よかりーろ

福の いかなる人が 黒髪の 白くなるまで 妹が音を聞く (作者不明 巻7・1411)  
何と幸せな人じゃらすどかい 白髪になるまで 妻の声を 聞かせる ちゅうことは

昼は咲き 夜は恋ひ寝る 合歡木の花 君のみ見めや 戯奴さへに見よ (紀女郎 巻8・1461)  
昼は咲き 夜は誰かと恋して寝る合歡の花よい 家の主だけが見っとじゃか



風流な若っか下部の お前たちも 見るが良かゾ

暇<sup>いとせ</sup>無み 来ざりし君に ほととぎす われかく恋ふと 行きて告げこそ

(大伴坂上郎女 巻8・1498)

暇<sup>いとせ</sup>んなかちゆて 訪ねて来らっさん あの人の ホトトギスよい 私がこがん  
恋い焦がれとつとを 行たて伝えてくれろネ

夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の 知らえぬ恋は 苦しきものぞ

(大伴坂上郎女 巻8・1500)

夏の夜の繁みに ひっそり咲く姫百合が 人に知られんごて あの人の知ってもらえん  
私の恋は苦しかとヨ

タされば 小倉<sup>おぐら</sup>の山に 鳴く鹿は 今夜<sup>こよい</sup>は鳴かず い寝にけらしも (岡本天皇 巻8・1511)

夕暮れになれば 小倉山で鳴く鹿が 今宵は鳴かんとん  
もう夫婦ばりい 寝たっじゃろかい

言<sup>ことしげ</sup>繁き 里に住まずは 今朝鳴きし 雁にたぐひて 行かましものを (但馬皇女 巻8・1515)

口やかましか里なんかに住んどらんじゃったちゃ  
今朝鳴<sup>つん</sup>やた雁と連のうで 飛うではってけば 良かったてえま

彦星は 織女と 天地の別れし時ゆ いなむしろ 川に向き立ち 思ふそら 安けなくに 青波に  
望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや 息づき居らむ かくのみや 恋ひつつあらむ  
さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま<sup>かい</sup>權もがも (山上憶良 巻8・1520)

彦星は織り姫と 天と地が別れた昔から 天の川に向かい合うて立っとらす  
恋する心は若こうして 嘆く胸の内は落ち着かん  
青か波で 向こう岸が見えんごてなった 白雲が隔てた 遙かかなたに  
涙は洩れてしもた ああ こが人も溜息ついておらりゅうかい  
こが人も恋焦がれておらるるもんか 赤う美しゅう塗られた小舟が欲しか  
玉を巻き付けた 權<sup>かい</sup>はなかもんじゃろかい

彦星し 妻迎へ舟 漕<sup>づ</sup>ぎ出らし 天の川原に 霧の立てるは (山上憶良 巻8・1527)

彦星が妻を迎える舟を 漕ぎ出したそうなもんじゃん  
天の川原に 霧<sup>みすしぶき</sup>ン立っつとは そん水飛沫ばい

萩の花 尾花<sup>くず</sup> 葛花 なでしこの花 をみなへし また藤袴<sup>ふじはかま</sup> 朝顔の花 (山上憶良 巻8・1538)

秋の野に咲く 七草 萩 すすき 葛 撫子 おみなえし そして藤袴 朝顔

夕月夜<sup>ゆうづくよ</sup> 心もしのに 白露の 置くこの庭に 蟋蟀<sup>こおろぎ</sup>鳴くも (湯原王 巻8・1552)

秋夕方ン月が出て 心も憂い<sup>しお</sup>萎るるごとて 白露の降りとるこん庭で 秋の虫が鳴きよる  
沫雪<sup>あわゆき</sup>の ほどろほどろに 降り敷けば 平城<sup>なら</sup>の京<sup>みやこ</sup>し 思ほゆるかも (大宰帥大伴卿 巻8・1639)  
太宰府に 沫雪<sup>あわゆき</sup>がうっすらと降り積も<sup>と</sup>と<sup>と</sup>とを見れば 奈良の都が思い出さるる

我が岡に 盛り咲ける 梅の花 残れる雪を まがへつるかも (大宰帥大伴卿 巻8・1640)  
私の岡に 今を盛りに咲く白梅の花と 残雪を見間違えてしもたバイ

今日降りし 雪に<sup>きほ</sup>競ひて 我がやどの 冬木の梅は 花咲きにけり (同上 巻8・1649)  
今日降った雪に 負きゆうみゃどもて 私の宿ン 冬枯れン梅の木が 花バ咲かせたっソ

ひさかたの 月夜を清み 梅の花 心開けて 我が思へる君 (紀少鹿女郎 巻8・1661)  
空遠くまで輝く 月夜が清らかだけん 夜開く梅ン花ンごとて 心も晴々としとる  
私がお慕いしとるあなた ※「ひさかたの」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

さ夜中と 夜は深けぬらし 雁が音の 聞ゆる空に 月渡る見ゆ (柿本人麻呂歌集 巻9・1701)  
もう夜が更けたっじゃろ 雁が鳴きながら飛ぶ空に 月も低うなりかけとらす

泊瀬<sup>はつせ</sup>川 夕渡り来て 我妹子<sup>わぎもこ</sup>が 家<sup>と</sup>のかな門に 近づきにけり (柿本人麻呂歌集 巻9・1775)  
泊瀬<sup>はつせ</sup>川を夕方に渡ってきて ようよして 愛しか妻の家ン門に近づいた

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 我が子に羽ぐくめ 天<sup>あめ</sup>の鶴群<sup>たづむら</sup> (作者未詳 巻9・1791)  
旅人が宿る野に もし霜が降るなら どうか我が子を 羽で包んでくだっせ  
天を飛ぶ 鶴の群れたちよい

潮気<sup>しほけ</sup>たつ 荒磯<sup>ありそ</sup>にはあれど 行く水の 過ぎにし妹が 形見<sup>こ</sup>とぞ来し  
(柿本人麻呂 巻9・1797)

潮煙<sup>しほけ</sup>ン立つ荒涼<sup>こうりよう</sup>たるこの磯に 亡くなった妻の形見<sup>こ</sup>と思うてやって来やした

ひさかた 天の香具山 このゆふへ 霞たなびく 春立つらしも (作者未詳 巻10・1812)  
天の香具山に こん夕暮れ 霞のかか<sup>と</sup>とる もう春になったばいナ

梅の花 降り覆ふ雪を 包み持ち 君に見せむと 取れば消につつ (作者未詳 巻10・1833)  
梅の花を覆うごとて 降った雪を 包うで持ち戻って あの人の 見しゅうどもとるばって  
取ったかたっぱしから 消ゆっちゃもね

霞<sup>かすみ</sup>立つ 春の長日を 恋ひ暮らし 夜も更けゆくに 妹も逢<sup>い</sup>はぬかも (作者未詳 巻10・1894)  
霞<sup>かすみ</sup>ン立つ春の長か一日を 恋しか思いで過ごして 夜も更けてきたて  
まこて アン娘が現れてくれんかね

あが為と 織<sup>たなばたつめ</sup>女の そのやどに 織<sup>しろたえ</sup>る白栲は 織<sup>はくふ</sup>りてけむかも（柿本人麻呂歌集 巻10・2027）  
私のために織<sup>たなばたつめ</sup>姫が 家で織<sup>しろたえ</sup>っとるちゅう 白布はもう織<sup>はくふ</sup>り上げらしたろかい

君に逢はず 久しき時ゆ 織<sup>はた</sup>る服の 白栲<sup>しろたえ</sup>の衣<sup>ころも</sup> 垢<sup>あか</sup>付くまでに（柿本人麻呂歌集 巻10・2028）  
あなたに逢<sup>あ</sup>わでにゃ ずっと織<sup>はた</sup>り続けとる白妙<sup>しろたえ</sup>の衣<sup>ころも</sup>は もう垢<sup>あか</sup>ン付<sup>ち</sup>いたごてなつた

天<sup>かじ</sup>の川 楫<sup>かじ</sup>の音聞<sup>たなばたつめ</sup>こゆ 彦星<sup>こよひ</sup>と 織<sup>たなばたつめ</sup>女<sup>こよひ</sup>と 今夜逢<sup>こよひ</sup>ふらしも（作者未詳 巻10・2029）  
天<sup>かじ</sup>の川に 楫<sup>かじ</sup>の音<sup>かじ</sup>の聞<sup>たなばたつめ</sup>こゆる 彦星<sup>こよひ</sup>と織<sup>たなばたつめ</sup>り姫<sup>こよひ</sup>が 今夜逢<sup>こよひ</sup>わすとちゅうたネ

この夕<sup>ゆうへ</sup> 降りくる雨は 彦星<sup>こよひ</sup>の 早や漕ぐ舟の 櫂<sup>かい</sup>の散<sup>しずく</sup>りかも（作者未詳 巻10・2052）  
この夕方<sup>ゆうへ</sup>降<sup>しずく</sup>る雨は 彦星<sup>こよひ</sup>が急<sup>しずく</sup>えて漕<sup>しずく</sup>いどる舟<sup>しずく</sup>ン櫂<sup>かい</sup>の滴<sup>しずく</sup>じゃかろかい

萩<sup>ひさ</sup>の花 咲けるを見れば 君に逢<sup>ひさ</sup>はず まことも久<sup>ひさ</sup>に なりにけるかも（作者未詳 巻10・2080）  
萩<sup>ひさ</sup>の花の咲<sup>ひさ</sup>ゃーとつとを見れば あの方に会<sup>ひさ</sup>い申<sup>ひさ</sup>さんまま  
まこて 長<sup>ひさ</sup>う経<sup>ひさ</sup>ったもんじゃあるばい

思<sup>しぐれ</sup>はぬに 時雨<sup>しぐれ</sup>の雨は 降りたれど 天雲<sup>つくよ</sup>はれて 月夜<sup>つくよ</sup>さやけし（作者未詳 巻10・2227）  
思<sup>しぐれ</sup>いがけん時雨<sup>しぐれ</sup>が降<sup>しぐれ</sup>ったばって いつの間<sup>しぐれ</sup>にじゃい 天雲<sup>つくよ</sup>がのうなつて 月夜<sup>つくよ</sup>になつた

秋萩<sup>あき</sup>の 咲<sup>あき</sup>き散<sup>あき</sup>る野<sup>あき</sup>辺<sup>あき</sup>の 夕霧<sup>ゆき</sup>の 濡<sup>あき</sup>れつつ来<sup>あき</sup>ませ 夜<sup>あき</sup>は更<sup>あき</sup>けぬとも（作者未詳 巻10・2252）  
秋萩<sup>あき</sup>が咲<sup>あき</sup>いては散<sup>あき</sup>る 野<sup>あき</sup>辺<sup>あき</sup>の夕霧<sup>ゆき</sup>に たとえ濡<sup>あき</sup>れたっちゃ 来<sup>あき</sup>て下<sup>あき</sup>さいませ  
どがん 夜<sup>あき</sup>が更<sup>あき</sup>けたっちゃ よかですけん

※ 「来ませ」（お出でなさいませ） 天草方言「来ませ・来なさせ・お出でませ」

わが背<sup>あわゆき</sup>子を 今<sup>あわゆき</sup>か今<sup>あわゆき</sup>かと 出<sup>あわゆき</sup>で見<sup>あわゆき</sup>れば 沫雪<sup>あわゆき</sup>降<sup>あわゆき</sup>れり 庭<sup>あわゆき</sup>もほどろに（作者未詳 巻10・2323）  
あの方がい<sup>あわゆき</sup>らっしゃつとば 今<sup>あわゆき</sup>か今<sup>あわゆき</sup>かと待<sup>あわゆき</sup>つて 外<sup>あわゆき</sup>に出<sup>あわゆき</sup>てみたりゃ  
沫雪<sup>あわゆき</sup>が庭<sup>あわゆき</sup>にうっすらーと 降<sup>あわゆき</sup>り積<sup>あわゆき</sup>もつとります

たらちねの 母<sup>あは</sup>が手<sup>あは</sup>放<sup>あは</sup>れ かくばかり すべなきことは いまだせなくに（作者未詳 巻11・2368）  
母<sup>あは</sup>の手<sup>あは</sup>から離<sup>あは</sup>れて こがん どうしょうもなか思<sup>あは</sup>いを したことは なかつたとに

※ 「たらちねの」は、「母」に掛かる枕詞

たらちねの 母<sup>あは</sup>に障<sup>あは</sup>らば いたづらに 汝<sup>いまし</sup>も吾<sup>いまし</sup>も 事<sup>いまし</sup>のなるべき（作者未詳 巻11・2517）  
母<sup>あは</sup>に遠慮<sup>あは</sup>して 気兼<sup>あは</sup>ねしてぐすぐずしとれば あんたも私<sup>あは</sup>も 一<sup>あは</sup>緒<sup>あは</sup>になられんもね

誰<sup>た</sup>れぞこの わが宿<sup>た</sup>来<sup>た</sup>呼<sup>た</sup>ぶ たらちねの 母<sup>た</sup>に嘖<sup>た</sup>はえ 物<sup>た</sup>思<sup>た</sup>ふ吾<sup>た</sup>を（作者未詳 巻11・2527）  
誰<sup>た</sup>ネ 私<sup>た</sup>の家<sup>た</sup>に來<sup>た</sup>て呼<sup>た</sup>ぶとは 母<sup>た</sup>におごられて（恋<sup>た</sup>がバして） 私<sup>た</sup>ゃしょげとつとよ

たらちねの 母に知らえず 我が持てる 心はよし糸 君がまにまに (作者未詳 巻11・2537)  
母にも知らせとらんばって 私の気持ちはもう決めとっとヨ  
あんたの心のままにしてよかとよ

しん 験なき 恋をもするか 夕されば 人の手まきて 寝らむ兎故に (作者未詳 巻11・2599)  
どうしようもなか 恋をしたもんじゃあるばい  
よさりになれば 他の人ン手枕で寝とっとじゃろで (あん娘じゃろ まこて)

伊勢の海人の 朝な夕なに 潜くといふ 鮑の貝の 片思ひにして (作者未詳 巻11・2798)  
伊勢の海女が 朝夕の飯の しゃーに 潜って取るちゅう あわびのごて  
片思いのままで ※「潜く」は、水中に潜る 天草方言「かすく」

恋ひ恋ひて 後も逢はむと 慰もる 心しなくは 生きてあらめやも (作者未詳 巻12・2904)  
恋焦がれて 後でまた 逢わるっどじゃっか  
己を慰むる心が なからんば とても生きちゃ いかれそうになかもね

うつせみ 空蝉の 常の言葉と 思へども 継ぎてし聞けば 心感ひぬ (作者未詳 巻12・2961)  
世間の決まり文句ちゃ 思うばって 聞かされ続ければ やっぱり心は迷うとヨ  
※「空蝉の」は、「世間・世間の人・命」に掛かる枕詞

たらちねの 母が養う 蚕の繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢わずして  
(作者未詳 巻12・2991)  
母が飼うとる蚕が 繭に隠って 身動きできんごて 私も 塞いだ心が晴れん  
あの娘に会えん もんじゃって ※「たらちねの」は、「母」に掛かる枕詞

あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 妹待つ我を  
(作者未詳 巻12・3002)  
山から出る月を 待とっと ちゆて人にや言うたばって 私ゃ あん娘を 待とっと  
※「あしひきの」は、「山」に掛かる枕詞

磯城島の 日本の国に 二人あり とし思はば 何か嘆かむ (作者未詳 巻13・3249)  
この日本の国に 私の思うあの人 が もしも 二人おらすとなろば  
私ゃこぎゃんも 嘆かんちゃ よかつじゃばってま  
※「磯城島の」は、日本(大和)の枕詞

今更に 恋ふとも君に 逢はめやも 寝る夜をおちす 夢に見えこそ (作者未詳 巻13・3283)  
今更恋慕うたっちゃ あなた様にや逢えんとじゃろう

そんなろ 毎夜欠かさず 夢に出てきてよ

足柄の 箱根の山に 粟蒔きて 実とはなれるを 逢はなくもあやし (作者未詳 巻14・3364)  
足柄の箱根の山に 粟を蒔ゃーて実が結び 二人の仲も しっくり結ばれたとに  
逢わない (粟がない) ちゅうのは なんちゅうこつかい

伊香保ろの やさかの<sup>いで</sup>堰に 立つ虹の <sup>あらは</sup>顯ろまでも 共寝をさ寝てば (作者未詳 巻14・3414)  
伊香保の八坂の堰に立つ虹が あられるまでは (人に知られるまでは)  
お前と一緒に こがんで すうっと共寝しとこうごたるネ

恋しければ 来ませわが背子 垣つ柳 <sup>やぎ</sup>末摘み<sup>うれ</sup>からし われ立ち待たむ (作者未詳 巻14・3455)  
恋しかとなろば お出でなさいませ 愛しかあなた 垣根の柳の枝先が  
きゃー枯れてしまうごて 摘み切りながら 私ゃ立ち続けて お待ちしとりますとヨ  
※「来ませ」は、おいでなさいませ 天草方言「来ませ・お出でませ」

妹が<sup>ぬ</sup>寝る 床のあたりに <sup>いは</sup>石くぐる水に もがもよ入りて 寝まくも (作者未詳 巻14・3554)  
彼女が寝とる床の辺りに 岩間をくぐる水になっと なれたろよかてなあ  
すうっと もぐりこうで 一緒に寝っとこれ まあ  
※「ぬる」は、寝る 天草方言「ぬる」

愛<sup>かな</sup>し妹を 何処行かめと <sup>やますげ</sup>山菅<sup>そがひ</sup>の 背向に寝しく 今し悔しも (作者未詳 巻14・3577)  
愛しい妻じゃばって どこさんはってくわけでもなか と思うて  
<sup>やますげ</sup>山菅の葉のごて 背中合わせで寝てしもうた事が 今じゃ悔やまれて のさん  
※「山菅の」は、「背向」に掛かる枕詞

このころは 恋ひつつもあらむ <sup>たまくしげ</sup>玉櫛笥 あけてをちより すべなかるべし  
(狭野弟上娘子 巻15・3726)

今はまーだ 顔を見とるけん よかばって 夜が明ければ  
あなた様は じきに はってかす 私ゃ どがんしょうはなか じゃっかネ

思ひつつ<sup>ぬ</sup>寝れば かもとなぬばたまの 一夜もおちず <sup>いぬ</sup>夢にし見ゆる (同上 巻15・3738)  
あなたば思いながら <sup>ぬ</sup>寝るけんじゃろかい  
一夜も欠かさず すっとあなた様を 夢にみますとヨ ※「いぬ」(夢)

<sup>たちばな</sup>橘の 寺の長屋に 我が<sup>い</sup>卒寝し <sup>うなぬはなり</sup>童女放髪は 髪上げつらむか (作者未詳 巻16・3822)  
橘寺の長屋に 私が連れ込うで 寝たっじゃって まーだ髪も結うとらん あん娘は  
もう 髪上げする年頃にだ なったろうかにゃ  
※「童女放髪」(髪を伸ばしたままにした15歳くらいまでの娘)

しょうす ひるつ か たい 願ふ 我にな見えそ 水葱の 羹 (長意吉麻呂 巻16・3829)  
酢醬油に 野蒜を 搗き混ぜた垂れを作って 鯛を食いたか ともとつとに  
こん俺さまの目の前から 消えてくれ 旨もなか 水葱の吸物 なんの

射ゆ鹿を 認ぐ川辺の 和草の 身の若かへに 共寝し子らはも (作者未詳 巻16・3874)  
手負いの鹿ん 後を追うとつて 川辺の柔らか草むらで 我が身も若っか頃  
抱いて寝た娘のことが 懐かしゅう俤ばるる

梅の花 いつは折らじと いとはねど 咲きの盛りは 惜しきものなり (大伴書持 巻17・3904)  
梅の花は 何時折るか 別段 厭う訳でもなかばってん  
咲き盛りに そのまま見とるちゅうとも 実に 惜しか気のする

うぐいす き 鳴く山吹 うたがたも 君が手触れす 花散らめやも (大伴池主 巻17・3968)  
うぐいすが来て鳴く山吹は まさかあなた様が 手も触れんうちに  
散ったりは せんどもんネ

港風 寒く吹くらし 奈の江に 妻呼び交し 鶴多に鳴く (大伴家持 巻17・4018)  
海風が寒う 吹いとるごたる 奈呉の入江で 鶴の夫婦が 互いに呼び合うて  
ぎょうさん 鳴やーとる

雪の上に 照れる月夜に 梅の花 折りて贈らむ 愛しき児もがも (大伴家持 巻18・4134)  
雪の上に 月光の輝く夜に 白か梅の花を折って贈るごたる みぞか娘は おらんかネ

ますらお 名を立つべし 後の代に 聞き継ぐ人も 語り継ぐがね (大伴家持 巻19・4165)  
男子たるものは まさに名を立つるべきである 後代その名を聞く人々が  
またその名を 人々に語り伝えるごて そうありたかもんだ

新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事 (大伴家持 巻20・4516)  
新しか年の初めと立春とが きゃー重なった きゅう降る雪のごて  
まだまだ良かことン重なれ